外国語教育メディア学会（LET）
関西支部 2017 年度秋季研究大会
発表要項集

日　時：　2017 年 10 月 14 日（土）9:30～17:10

場　所：　流通科学大学
〒651-2103 神戸市西区学園西町３-1
http://www.umds.ac.jp

主　催：　外国語教育メディア学会（LET）関西支部
http://www.let-kansai.org/

事務局：　〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641
東京理科大学 理工学部教養 山西博之研究室内
Tel: 04-7124-1501（代表）
E-mail: kansailet@gmail.com

プログラム

9:30-15:15　**受付** ■ 講義棟 VI 2 階カウンター

10:00-10:15　**開会行事** ■ 6301 教室
司会 ◆ 山西 博之（事務局長・東京理科大学）
挨拶 ◆ 藤井 啓吾（会場校・流通科学大学副学長 人間社会学部 教授）
挨拶 ◆ 杉森 直樹（支部長・立命館大学）

10:20-12:00　**ワークショップ 1** ■ 6204 教室**（当日先着順で 50 名まで）**
講師 ◆ 木村 修平（立命館大学）・清原 文代（大阪府立大学）
「今度こそキチンと学ぶ！構造化電子文書作成入門（Word から Markdown、EPUB まで）」
（電子語学教材開発研究部会）

ワークショップ 2 ■ 6203 教室**（当日先着順で 50 名まで）**
講師 ◆ 有本 純（関西国際大学）・河内山 真理（関西国際大学）
「小中高教員のための英語発音指導法」
（英語発音教育研究部会）

ワークショップ 3 ■ 6201 教室**（当日先着順で 50 名まで）**
講師 ◆ 西本 有逸（京都教育大学）・戸田 行彦（滋賀県立守山中学校・高等学校）
「「主体的・対話的で深い学び」につながるリーディング指導」
（中高授業研究部会）

10:00-15:00　**業者展示** ■ 講義棟 VI 2 階

12:00-12:40　Classroom Tips ① 12:00-12:20　② 12:20-12:40 ■ 6202 教室
司会 ◆ 今井 裕之（関西大学）
① ライティング授業における Slack の活用
浦野 研（北海学園大学）
② AI ボットでアウトプットトレーニングを！
東 淳一（神戸学院大学）

12:00-13:00　**昼食** ■
運営委員会 ■ 講義棟 VI 3 階会議室

13:00-14:50　**研究発表・実践報告・教材開発**　①13:00-13:30　②13:40-14:10　③14:20-14:50
第 1 室（研究発表）■ 6201 教室
司会 ◆ 佐々木 顕彦（武庫川女子大学）
① 日本人高校生、帰国生及び英語 L1 素材の文法的傾向の比較：より使える頻度別英語表現の普及を目指して
幸前 憲和（(株)クロスインデックス）
② 学習指導要領と発音指導：教授用資料の分析
河内山 真理（関西国際大学）・有本 純（関西国際大学）
③ 初級英語学習者の批判的思考力・コミュニケーション能力を養成する「シンプル・ディベート」の導入
橋尾 晋平（同志社大学大学院生）

第 2 室（研究発表・実践報告）■ 6203 教室
司会 ◆ 平井 愛（神戸学院大学）
① Assessing reading speed and accuracy using the Scrolling Cloze Activity
Thomas Robb (Kyoto Sangyo University)

② PeerEval App for More Classroom Speaking Practice
Thomas Robb (Kyoto Sangyo University)
③ Examining the forms and functions of silence in the EFL classroom: Using COPS to provide a quantitative perspective
Kate Maher (Kyoto University of Foreign Studies)

第 3 室（実践報告・教材開発）■ 6204 教室
司会 ◆ 氏木 道人（関西学院大学）
① 動的スケジュールによる語彙反復学習のパフォーマンス向上： e-Learning への活用
松田 成弘（神戸市立楠高等学校）
② 高校生を対象にした英語授業用タスク
濱地 亮太（関西大学大学院生）

14:50-15:00 **休憩**

15:00-17:00 **シンポジウム ■ 6301 教室**
「変革の時代における外国語教員の養成を考える：求められる能力・知識・技能のあり方について」
司会 ◆ 野村 和宏（神戸市外国語大学）
パネリスト ◆ 粕谷 恭子（東京学芸大学）・鈴木 渉（宮城教育大学）
コーディネータ・パネリスト ◆ 竹内 理（関西大学）

17:00-17:10 **閉会行事 ■ 6301 教室**
司会 ◆ 山西 博之（事務局長・東京理科大学）
挨拶 ◆ 伊庭 緑 （副支部長・甲南大学）

17:30-19:30 **懇親会 ■ Ryuka Dining（カフェテリア）**
司会 ◆ 平井 愛 （神戸学院大学）
挨拶 ◆ 山本 勝巳（副支部長・流通科学大学）

お知らせ

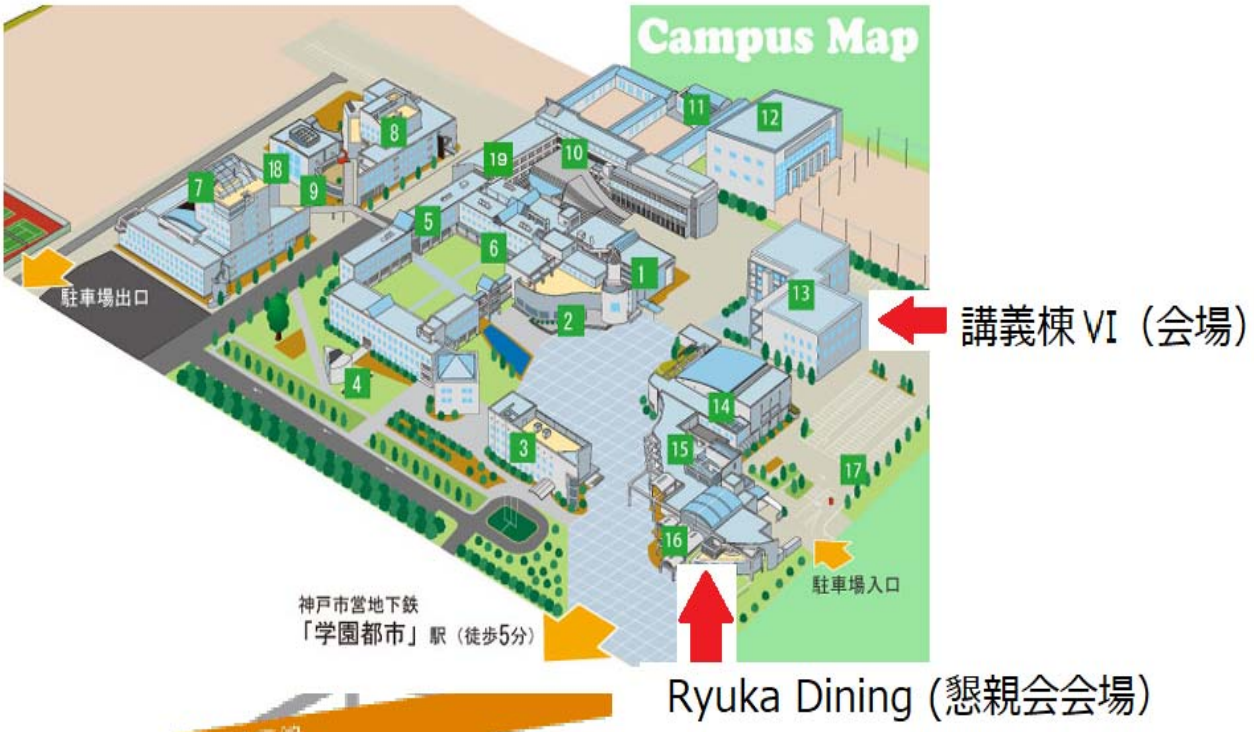
- 参加者は，受付にて必ず参加登録票にご記入のうえ，ネームホルダーをお受け取りください。LET 会員は無料です。非会員の方は当日会費 2,000 円（大学院生は，学生証を提示していただくと 1,000 円）を受付でお支払いください。また，学部生は無料でご参加いただけます。なお，支部大会当日にご入会いただくことも可能ですので，支部事務局（受付）までお申し出ください。
- 当日学内の食堂、コンビニエンスストアが営業しております。また近隣のレストランもご利用ください。
- 学内は全面禁煙です。また CALL 教室内は、飲食禁止です。
- 懇親会は Ryuka Dining（流通科学大学カフェテリア 2 階）にて開催いたします。参加費は 2,000 円（学生 1,000 円）です。当日受付にてお申し込みください。

会場への交通案内・会場案内図

■ 大阪方面：JR「三ノ宮」・阪神・阪急「神戸三宮」駅より神戸市営地下鉄西神山手線「西神中央方面」に乗り換え、「学園都市駅」下車、北へ徒歩 5 分

■ 姫路方面：① JR「新長田」駅より神戸市営地下鉄西神山手線「西神中央方面」に乗り換え、「学園都市駅」下車、北へ徒歩 5 分

② JR「舞子」駅より「学園都市駅行き」のバスに乗り、「学園都市」駅下車、北へ徒歩約 5 分



学内の有料駐車場がご利用いただけます（1 時間 100 円）。

変革の時代における外国語教員の養成を考える：求められる能力・知識・技能のあり方について

竹内 理 (関西大学)　鈴木 渉 (宮城教育大学)　粕谷 恭子 (東京学芸大学)

（シンポジアムの趣旨）　竹内 理（コーディネータ）

本シンポジアムは、パネリストからの話題提供をうけ、変革の時代における外国語教員養成のあり方について、フロアを巻き込んだ活発な議論がおこるよう企図したものである。単なる発表の羅列にとどまらず、その場での議論と思考が深まるような機会となるよう、参加者の皆さんにもコラボレーションを頂ければ、嬉しい限りである

粕谷 恭子　「コア・カリキュラムが目指す外国語教員の能力・知識・技能」

本発表の目的は「コア・カリキュラム」が目指す外国語（英語）教員の能力・知識・技能の紹介を通して、特に小学校での指導にあたる教員の能力・知識・技能のありようとその養成・研修について話題を提供することである。

東京学芸大学は、平成 26・27 年度に文部科学省から委託を受け「英語教育の英語力・指導力強化のための調査研究事業」に取り組み、「小学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム」「小学校教員研修 外国語（英語）コア・カリキュラム」「中・高等学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム」「中・高等学校教員研修 外国語（英語）コア・カリキュラム」を策定した。

本発表では、（1）これら 4 つの「コア・カリキュラム」を概観し、特に（2）小学校で外国語活動・外国語科を担当する教員に求められる能力・知識・技能をどのようにとらえているか紹介する。そのうえで、(3) 児童にとっての望ましい英語経験について整理する。新しい英語教育は、2 年間の外国語活動と 8 年間の教科としての外国語の 10 年計画で進められる。その中の 4 年間を請け負う小学校の果たすべき役割・存在感は自ずと高くなることが予想される。児童期にふさわしい英語経験を授業の中で展開するまえに、指導者に必要な能力・知識・技能についてフロアの皆さまと共に考えたい。

児童期にふさわしい英語経験について考えるとき、5 領域のうち「聞く・話す」の音声言語が中心となることは想像に難くない。（4）音声が果たす役割と授業の中でインプットの質と量を向上させる手立てを提案したい。小学校の先生方は概して英語に自信がないと感じているが、そのような中でもできることは何か。また、英語力の高い外部人材に求めることは何か。共に考えを深めることで、より子どものためになる授業、10 年計画のトップバッターとして確実に効果をあげる授業が可能になると期待している。

鈴木 渉　「第二言語習得研究の視点からみる外国語教員の能力・知識・技能」

本発表の目的は、これからの時代の外国語(英語)教員に求められる能力・知識・技能の育成及び向上について、第二言語習得研究の視点から、話題を提供することである。平成 29 年 3 月に公示された中学校新学習指導要領においても、「授業は英語で行うことを基本とする」と規定され、中・高等学校の教師が積極的に英語を使用することが求められている。また、小学校英語の教科化においても、教師の豊富な英語使用がより一層求められる。したがって、指導者の英語力の向上が喫緊の課題である。本発表では、まず、英語力の定義を確認し、次いで、どのような指導が英語力の向上に貢献するのかを概観したい。第二言語習得研究では、第二言語能力（英語力）を明示知識と暗示的知識から定義している。明示的知識とは、１つ以上の名詞を指す場合に形態素-s/es

をつける（two cats）というように、言葉で説明できる知識である。暗示的知識とは、そのような知識を実際のコミュニケーション場面で運用できることを指す。我々英語教員が授業を英語で行うための英語力は暗示的知識である。当日は、暗示的知識の習得に効果的だとされているフォーカス・オン・フォーム (focus on form) やタスク・ベースの指導 (task-based language teaching) 等の成果を紹介する。

新学習指導要領では「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を育成していくことが求められており、これまでの英語教員が蓄積してきた実践知だけではなく、「主体的で対話的で深い学び」の観点から授業改善を行う必要がある。そのような授業改善を行うために、(1)第二言語習得研究者と英語教員のコラボレーションや(2)教員自身のアクション・リサーチ（action research）が必要だと考えられる。まず、ここで言う、コラボレーションとは、第二言語習得研究者が現場の英語教員と共同で研究を行うことを指す。そのようなコラボレーションによる研究はこれまで多くなされており、そのようなコラボレーションに参加することよって、間接的に、現場の教員が授業改善を行うための能力・資質・技能を身につけることができると考えられる。アクション・リサーチとは、現場の教員自身が授業改善（教授法、指導法）に必要だと感じることを、彼ら自身が検証することを指す。徐々にではあるが、アクション・リサーチに従事することで、教員としての成長を促すことが示されてきている。当日では、そのような第二言語習得研究の成果を紹介したい。

第二言語習得の理論や研究と、これからの時代の外国語(英語)教員に求められる能力・知識・技能の在り方やその育成・向上についての関係は単純なものではない。本発表が、そのギャップを少しでも埋めるものになれば、幸いである。

竹内 理　「外国語教育学・教育メディア論の観点からみる外国語教員の養成」

本発表では、3 月に示された学習指導要領の改訂にとどまらず、これらも続く変革の時代に対応できる外国語教員像を描くため、外国語教育学と教育メディア論の視点から、様々な話題を提供していきたい。まず、現在進められている教育改革の背後には、どのような現状認識があるのかを概観する。その後、この現状認識に対応するための外国語（英語）教育改革で特に重要視される（1）パフォーマンスの評価と思考力・判断力・表現力の評価を、これからの時代における外国語教員にとっての必須の知識・技能として位置づけ、議論の話題を提供する。

続いて（2）評価を指導へつなげていくフィードバックのあり方について、ライティングの評価・フィードバックに焦点をあて、事例を紹介したい。教育においては、知識・技能の習得を促進する（効果をあげる）のは当然のことではあるが、同時に効率（あるいは教員の QOL: Quality of Life）をも維持しなければ、持続性のある教育を行うことはできない。この比較的忘れられやすい側面を俎上にあげて、研究の方向性とも絡めながら、議論してみたい。

この後、盛んに主張されている ICT の活用について触れ、（3）ICT に振り回されるのではなく、目的を持った使い方を重要視する立場を強調する。その立場から、「アフォーダンス」や「授業の円環」といった話題を提示する。最後にこれらのまとめとして、（4）教員養成における研究マインド育成の重要性について触れる。既存の知識と経験だけでは対応しきれない不確定な時代に向きあうためには、理論と実証データをもとに、自分なりに試行錯誤を続けていける資質こそが大切であるという考え方を示し、外国語教員養成のあり方に関するフロアとの議論をスタートしていきたい。

今度こそキチンと学ぶ！構造化電子文書作成入門
（Word から Markdown、EPUB まで）

木村 修平 (立命館大学)　清原 文代 (大阪府立大学)

開催要旨

本ワークショップでは、構造化電子文書のメリットを理解し、複数のアプリケーションを用いてその適切な作り方を学びます。構造化電子文書とは、端的には内容（コンテンツ）と書式（レイアウト）が分離して記述された電子文書全般を指します。適切に構造化された電子文書は、人間にとっては編集や印刷がしやすいという特長を有し、また、機械にとっても音声読み上げに対応しやすく、検索効率が高いなどのメリットがあります。

ところが、日本では書式を優先して電子文書が作られる奇妙な慣習が産官学の広範囲にわたって続けられてきたという現実があります。代表例として、表計算ソフトのセルを方眼紙のマス目のように組み合わせて非効率なデータ入力を強いる、いわゆる「神 Excel」問題が挙げられます。近年、SNS の普及とともにこうした非効率な電子データの様式に注目が集まるようになってきました。

これを千載一遇の好機ととらえ、電子語学教材開発研究部会では、教育・教務の現場に携わる一人でも多くの方に構造化文書の重要性を理解していただき、その作り方を実体験していただきたいと存じます。ワークショップでは、多くの方に利用されている Word を皮切りに、応用編として近年エンジニアのあいだで利用が進んでいる軽量マークアップ言語の Markdown、そして電子書籍のフォーマットである EPUB を取り上げます。

持ち込み端末に関するお願い

本ワークショップでは会場校にご用意いただいた端末を利用させていただく予定ですが、Word がインストールされた個人所有の電子端末（ノートパソコン、タブレットなど）の持ち込みも歓迎いたします。また、持ち込まれた端末をスマートフォンなどでテザリングし、インターネットに接続していただきますとスムーズに進行できますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

ワークショップ用資料

端末を持ち込んでいただける方はあらかじめ下記 URL をブックマークしていただきますよう、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

- ワークショップ用資料（Google スライド）： https://goo.gl/QmKfHU

小中高教員のための英語発音指導法

有本 純 (関西国際大学)　河内山 真理 (関西国際大学)

1. 発音指導法の必要性

学習指導要領の改訂により、小学校においても英語が教科化されると、中高の英語教員のように英語指導に慣れていない小学校教員の最大の課題は、教員自身の発音であり、児童にどう指導するかであろう。また、中高の英語科教員においても、教員免許取得の必須条件として英語の発音指導法は含まれないことが多く、指導に苦慮している実態がある。本ワークショップでは、英語音声学の知識がなくても理解できるよう配慮し、授業で実践できる指導法を提供する。

2. 指導の目標と教師の役割

発音の目標は、「通じること」が最重要で、多少日本語の影響が残ってもかまわないという態度をとらねばならない。ネイティブ並の発音を目指すのではなく、国際語としての英語 (EIL) 発音である。また、発音指導において求められる「教師の役割」は、以下の通りである。

1）英語と日本語の音声についての正しい知識を持ち、何が違うのかを理解している
2）調音法について、学習者に分かり易く説明できる
3）CD 等の媒体を用いずに、発音モデルを教師自身が提示できる
4）問題のある発音を聞いた場合、適切に判断し、矯正の為の指導・助言ができる

3. 導入指導

初めて発音を指導する場合、単にモデルを提示して模倣させるだけでは、再生を難しく感じる児童・生徒が多くいる。そこで、調音法をどのように説明するかで工夫が必要になる。もちろん、破裂音、軟口蓋などの音声学の専門用語は使えない。

母音に関しては、その音のイメージを与えるという手法をいくつか紹介する。子音に関しては、日本語にない音や調音で困難を感じる音で、指導上の注意点を説明し、誰にでもできる簡単な方法を提示したい。また、イントネーションの指導では、基本パタンを一語文から始め、次第に文へ発展させる方法を提示する。強弱のリズム指導では、教材を用いた指導法を示す。

4. 矯正指導

一通り発音指導を受けても、うまく発音できるとは限らない。そこで、問題点を修正する為に矯正指導が必要になる。言い換えると、導入指導の裏返しとなるので、導入での注意点を考慮し、少しの工夫によって、ある程度までは矯正が可能になるであろう。特に、日本語母語話者が陥りやすい問題点を取り上げ、その手法や教材を紹介し、体験していただく。

5. おわりに

通じる発音を心がけるには、先ず学習者に大きな声を出させる工夫をすることで、声の大きさは、発音の明瞭さにつながり、円滑なコミュニケーションを可能にする。恥ずかしがらずに大きな声を出させるには、教師側の配慮や工夫も必要になる。児童・生徒が声を出すことが心地よいと感じさせたり、人前で発表することが恥ずかしくないと思わせるヒントを最後に、提示したい。

参考文献

有本純（編著）2009『英語の発音指導法の開発：国際英語の観点に基づく導入から矯正まで』科研報告書, 関西国際大学.

「主体的・対話的で深い学び」につながるリーディング指導

西本 有逸 (京都教育大学)　戸田 行彦 (滋賀県立守山中学校・高等学校)

1. はじめに

リーディング指導は奥が深く難しい。次期学習指導要領のキーコンセプトである「主体的・対話的で深い学び」につながるよう，ミクロとマクロな視点から考えたい。戸田は発問作成の観点から，西本はペレジヴァーニエとミメーシスという観点から理論的・実践的提案を行う。

2. 発問について

田中・田中(2009)によると発問とは「生徒が主体的に教材に向き合うように，授業目標の達成に向けて計画的に行う教師の働きかけ」であり，田中・島田・紺渡(2011)は発問を「事実発問」「推論発問」「評価発問」の３種類に分類している。また，門田・野呂・氏木(2010)はリーディング指導における発問を考える４つのポイントとして「教材の解釈」「生徒の把握」「目標の設定」「授業の構想」を挙げている。しかし，これらはすべて教師が発問を行うべきであるという暗黙の了解が含まれている。伊東(2008)は発問者に関して，①教師から生徒へ，②生徒から教師へ，③生徒から生徒への３種類を挙げており，生徒一人一人が教師に対して，あるいは他の生徒に対しても積極的に発問できる雰囲気を作ることも重要であると述べている。また，大下(2014)は推論発問や評価発問の効果についても可能性を述べている。

3. ペレジヴァーニエ（情動的体験）とミメーシス（創造的模倣）について

深い学びとはアクティブラーニングで提唱されるような授業形態に拠るのではなく，対象となる教育内容や教材の価値によって決まるということをまず確認したい。そして，深い学びは強靭な理論を必要とするのだが，最近の人間諸科学のキーワードであるペレジヴァーニエとミメーシスを導入する。ペレジヴァーニエは人間の外に存在する何かと関係し，他方で主体がそれをどのように体験するかが重要となる(ヴィゴツキー)。ミメーシスとはプラトンとアリストテレスに端を発し，「モデルをまねつつ，対象に意味を与え，生気あらしめる創造行為である」(久米 1985)。

4. ワークショップの内容

前半では中学高校で使用されている英文を読み，推論発問と評価発問を作成していただく（事実発問は時間の関係で割愛する）。後半ではペレジヴァーニエに関するテクストとそれを「なぞる」というミメーシスについて考えたい。

参考文献

Cole, M. et al. (2016). Symposium on Perezhivanie. *Mind, Culture, and Activity*, *23*, 271-357.
Fleer, M., Gonzalez Rey, F. & Veresov, N. (2017). *Perezhivanie, Emotions and Subjectivity.* Springer.
伊東治美 (2008). 『アウトプット重視の英語授業』　教育出版
門田修平・野呂忠司・氏木道人 (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』　大修館書店
久米博 (1985). 準＝物語テクストとしての神話・夢・幻想　「思想」735, 101-110.　岩波書店
大下邦幸 (2014). 『意見・考え重視の視点からの英語授業改革』　東京書籍
田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸 (2011). 『推論発問を取り入れた英語リーディング指導』三省堂
田中武夫・田中知総 (2009). 『英語教師のための発問テクニック』　大修館書店

ライティング授業における Slack の活用

Using Slack in a Writing Classroom

浦野 研 (北海学園大学)

キーワード：Slack，ライティング，授業支援ツール

英語ライティングの授業で fluency 獲得を目指してブログや SNS を利用する取り組みは多く見られるが、今回はそういったコミュニケーション・ツールのひとつである Slack の活用事例について報告する。Slack 利用の技術的な側面に焦点を当て、ライティング活動の実践例を紹介し、Slack と Google スプレッドシートを連携させることで、Slack のログを自動的に保存し、学生ひとりひとりの投稿を集計し分析する方法について共有したい。

AI ボットでアウトプットトレーニングを！

Speaking/Writing Training Using AI Bots

東 淳一 (神戸学院大学)

キーワード：AI Chat Bot，自由対話，アウトプット訓練

AI らしいふるまいをするチャット用の Bot アプリが普及するなか、特に iPhone や Android で動作する Cleverbot を例にとって音声対話の練習を行う方法を紹介する。さらに cleverbot の Web ページでタイプ入力し文字ベースでチャットする方法などを紹介するとともに、学習者に常時アウトプット訓練を行わせる方法について参加者と情報共有したい。

日本人高校生、帰国生及び英語 L1 素材の文法的傾向の比較：より使える頻度別英語表現の普及を目指して

Analysis of Grammatical Tendency between Japanese High Schoolers, Returnees and L1 English Speakers: Spread the High-Frequency Grammar Acquisition in Japan

幸前 憲和 (株式会社クロスインデックス)

キーワード：文法使用頻度別，後置修飾，助動詞

1. はじめに

全文法事項を均等配分指導することは得策なのであろうか。優れた先行研究が示すように英語 L1 話者が多用する表現と日本の学校で教わる表現には明らかな差異がある。筆者は日本人読解聴解力飛躍のカギである名詞の後置修飾とイメージを膨らませる助動詞用法いわゆる仮定法を中心に調査をした。

2. 調査対象と手順

筆者の前任 SELHI 高校の 3 年生 46 名(1 年交換留学者 2 名)、帰国生専門塾で担当した小学生 6 年生 11 名(最短 1 年～最長 6 年滞在)及び授業で扱ったアニメ映画“THE INCREDIBLES”と“ICE AGE”の 2 本を英語 L1 話者の基準として加え調査対象とした。測定については 3 つの対象題材の総語数がそれぞれ 15000 語半ばであったため複雑な統計は取らず文法項目別使用頻度をそのまま算出し調査をした。

3. 結果と考察

文法使用頻度別の一例　関係詞後置修飾ベスト 3

	日本人エッセイ 平均語数 350 語×46 編		帰国生エッセイ 平均語数 513 語×31 編		アニメ映画 2 編　10928 語+5365 語	
1	主格 who + V	16 例	名詞 SV（接触節）	33 例	名詞 SV（接触節）	26 例
2	名詞 SV（接触節）	12 例	主格 that + V	26 例	主格 that + V	9 例
3	主格 which + V	8 例	目的格 that + SV	22 例	主格 who + V	8 例

関係詞を知る前から英語 L1 の幼児はまず“the toy I wanted”などの接触節を口にするようであるが、河上(1998)や井戸垣(2003)等の英語 L1 記事や台本を使った調査において関係代名詞目的格という点では接触節が最多で which は皆無に近く、主格では that が最多であることを示した。筆者調査でも帰国生、アニメ共に接触節が最多であった。日本人の接触節 12 例の内 4 例は提示題目の引用と思われるため実質順位は下がる。主格 that も帰国生、アニメ共に上位であるが、日本人では which が上位に入った。頻度を度外視した公式的一律指導から離れ学生の耳と目にもっと届く教授の拡散が望まれる。

イメージ助動詞がどれだけ主節にあるかの調査では would, could, might の合計が帰国生 93 例、アニメ 49 例、日本人 12 例の順となった。帰国生のエッセイテーマに想像を仕向けるものが多かったのも要因と思われるが、日本人は想像しないのであろうか。いや助動詞のコアが入力されていないのであろう。英語 L1 環境では幼稚園で will や can で自己実現を表現し、小学校に入る頃 would や could で想像を巡らせ、if 節は 3 年生頃に導入されるという。心の成長と共に習得される最高頻度の助動詞は教員が如何に学生の心を動かし感情表現を乗せてあげられるかに掛かっていると言っても良いであろう。

参考文献

井戸垣　隆（2003）．関係代名詞の使用と省略について 『関西外国語大学研究論集』77, 147-163.

河上邦雄（1998）．名詞の後置修飾としての関係詞節と分詞句の用法 『福井工業大学研究紀要』第 28 号, 78-84.

学習指導要領と発音指導：教授用資料の分析

The Course of Study and Pronunciation Teaching: An Analysis of Teacher's Manuals

河内山 真理 (関西国際大学)　有本 純 (関西国際大学)

キーワード： 発音指導，中学英語，教授用資料

1. はじめに

中学校英語の学習指導要領解説では，発音について，「現代の標準的な発音」すなわち，多様な人々とのコミュニケーションが可能となる発音を身に付けさせるとなっている。英語の発声や正しい発音の仕方を理解させ，練習させる必要性や，日本語との違いに留意することなども述べられている。具体的な学習項目として，連結による音変化，語・句・文における基本的な強勢，文の基本的なイントネーション，文における基本的な区切りを挙げている。また，音声指導に当たっては，補助として発音表記を用いて指導できるとなっている。

2. 調査

検定用教科書は，学習指導要領に従って内容が組み立てられているが，本研究では，教員が指導の参考に用いる教授料資料の内容について，取り扱い項目や教員用の解説，指導手順等について調べた。対象は，中学校検定教科書6種の教授用資料のうち，教科書と同じ体裁をとるTeacher's Bookと一般に「解説編」となっている具体的指導を記載した分冊である。

3. 結果と考察

学習指導要領解説で明記されている連結，強勢，イントネーション，区切りについては，すべての資料で扱われていた。しかしながら，多少記載方法に差があり，Teacher's Book を比べても，本文すべてにイントネーションの記号を付けているものや，主要な文にのみ付けているもの，強勢も 2 段階表示や 1 段階のものなどがあった。綴り字と発音について一覧表にまとめていても，その音をどのように調音すればよいのか説明がないもの，調音法を口腔図入りで説明しているものもあれば，綴り字と発音記号の対応，その音を含む単語例しか記載していないものもある。

解説編においては，教員向けに専門的な説明が載っている場合もあるが，一部は音声学的に不適切と考えられる説明もあった。また，Teacher's Book と解説編で少しずれた解説がされていることもあった。

もっとも重要なことは，生徒にどう伝えるかであるが，それについては，いささか不十分な内容が多かった。生徒にわかるように噛み砕いた説明や，具体的な練習例，うまくいかなかったときの対処方法など，教員が最も必要とする情報が十分とは言えない状態であった。

参考文献

上田洋子・大塚朝美 (2010). 発音と音声のしくみに焦点をあてた中学校英語教科書分析ーインプットの基礎を考察するー『大阪女学院大学紀要』7, 15-32

上田洋子・大塚朝美 (2014). 中学校検定教科書における音声指導項目の分析ー新学習指導要領での扱いの変化についてー『大阪女学院大学紀要』10, 1-15

初級英語学習者の批判的思考力・コミュニケーション能力を養成する「シンプル・ディベート」の導入

The Introduction of "Simplified Debate" to Foster Beginner-level Learners' Critical Thinking and Communication Skills

橋尾 晋平 (同志社大学)

キーワード：シンプル・ディベート，批判的思考力，コミュニケーション能力

1. 本発表の背景・目的

批判的思考力およびコミュニケーション能力は、ジェネリックスキルと呼ばれるものの一つで、大学教育において専攻分野に関わらず習得すべき技能に位置づけられている。松本他（2009）などが主張するように、ディベートはこれらの能力の養成において非常に効果的な言語活動である。ディベートは参加者がそれぞれの立場から意見やそれらへの反論を行う複数回のスピーチから構成される。従来の英語ディベートは、各スピーチを 5～8 分で行い、また、対立する 2 チームのやり取りの回数が増えることで、発話も複雑になっていくため、非常に難易度の高い活動とされ、積極的に英語ディベートを取り入れている教育現場は少ない（藤岡他 2017）。本発表では、初級英語学習者のクラスで英語ディベートを行うことを想定し、従来のディベートのコンテンツやフォーマットを大幅に簡略化した「シンプル・ディベート」とその授業デザインについての提案を行う。

2. 「シンプル・ディベート（simplified debate）」の方法論

「シンプル・ディベート」では、特定のテーマに対して対立する 2 チームが自分たちの立場に基づく意見を述べる立論と立論に対して反対意見を述べる反論をそれぞれ 1 回ずつ 1 分間のスピーチで行う。テーマは従来のディベートで扱われているような政策関連のものではなく、学生の趣味や嗜好などといった価値に関連したものを扱う。スピーチを作成するにあたって、「テンプレート（template）」と称する一定の雛型を与え、パタン・プラクティスと同じ要領で、空所に自分の意見を英語で書きこむことでスピーチを作成する。「テンプレート」に基づく原稿作成により、スピーチが論理的で聞き手に伝わりやすいものとなるように工夫する。また、クラス内で作成されたスピーチの内容は事前に共有しておくことで、反論のスピーチを作る準備を容易にする。さらに、学生同士がお互いのスピーチを評価し合える「評価シート」を作成し、教室というパブリックな場で他人に自分の意見を伝えることを意識づけ、また、他人のスピーチを評価する経験を通して、自身のスピーチに対する内省が働くようにする。

「シンプル・ディベート」の方法論の利点は、従来のスピーキングの活動と比べ、即興性こそ排除されているが、意見対立を通して批判的な思考を行う機会と聞き手を意識したスピーチを学生同士で行う機会を確保できることにある。初級英語学習者に対しても、批判的思考力・コミュニケーション能力の獲得・向上が期待できる。

参考文献

藤岡克則・橋尾晋平・金﨑茂樹・望月肇・ニール・ヘファナン・山内信幸 (2017). 高大接続を視座に入れた初年次「英語コミュニケーション」教育の考察—「シンプル・ディベート」導入の試みを通して—『比較文化研究』126, 17-28.

松本茂・鈴木健・青沼智 (2009).『英語ディベート—理論と実践』東京：玉川大学出版部.

Assessing reading speed and accuracy using the Scrolling Cloze Activity

Scrolling Cloze Activity で測る読解速度と語彙知識（の関係性）

Robb, Thomas（Kyoto Sangyo University, Emeritus）

Keywords: Reading, Reading speed, Assessment, Online Practice

1. Introduction

This paper describes an on-going project to measure students' improvement in reading speed and word recognition via a special app designed by the presenter called the "Scrolling Cloze Activity." A search for relevant literature yielded nothing recent even though the author consulted some of the leading scholars in the field.

2. Research questions

A) Does the scrolling cloze activity correlate well with students' reading speed or their reading ability as assessed by the TOEFL?

B) Can the improvement on the test over time be attributed to the amount of extensive reading that they have done over the course of a year?

C) Can any improvement be attributed to an improved ability to predict coming text based on their improved understanding of various elements of English knowledge, such as an expanded knowledge of word meanings, or how words collocate?

3. Procedure

After the students do a brief practice session, they receive four short passages from graded readers, one at a time, which have some words missing. Unlike the standard cloze, however, the entire passage is on a single line that scrolls across the student's screen, with periodic colored "?" marks appearing, along with a set of like-colored buttons from which the student selects the appropriate (original) word to fill in the blank. Feedback is instantaneous, with either the word popping into the sentence in the same color, or the correct word popping in with a grey background indicating that it was the wrong choice. The activity keeps track of their percentage correct individually for each of the passages, which are of increasing difficulty.

4. Results

Complete results will not be available until the students retake the TOEFL test in December of 2017, however, results to date based on the administration of the test in April and July with 125 students will be reported it seems that a finer analysis of the word functions in the moving text needs to performed since even for native speakers, some words are more easily predictable than others. Students' scores however jumped remarkably from April and the gain cannot be attributed to remember the short texts from 3 months previously.

References

Gough, P. B. and S. A. Wren (1999). Constructing meaning: The role of decoding, In. J. Oakhill and R. Beard (Eds), *Reading Development and the Teaching of Reading*, (pp.59-78). Malden, MA: Blackwell.

Smith, F. (1975). The Role of Prediction in Reading. *Elementary English, 25* (3), 305-311.

Stahl, S.A. et al. (1989). Prior knowledge and difficult vocabulary in the comprehension of unfamiliar text. *Reading Research Quarterly, 24* (1). 27-43.

Stahl, S.A. et al. (1991). Defining the role of prior knowledge and vocabulary in reading comprehension: The retiring of number 41. *Journal of Reading Behavior, 22* (4). 487-508.

PeerEval App for More Classroom Speaking Practice

スピーキングを活性化させる PeerEval アプリの開発

Robb, Thomas（Kyoto Sangyo University, Emeritus）

Keywords: Speaking, mobile applications, gamification

1. Background

New classrooms at the presenter's university feature six or eight digital displays on the wall that permit small groups of students to plug in their phone or computer in order to give their presentation to a small group of students. This configuration allows each student to rotate among the groups and repeat the presentation multiple times, providing more opportunities to speak and perfect their delivery.

While this system offers the students considerably more practice, it poses a problem for the instructor who cannot easily evaluate such simultaneous presentations. To solve this problem, the presenter passed out evaluation sheets so that the students could evaluate their peers following the rubric on the sheet. This, however, also posed a problem since the data thus generated had to be manually input by the instructor. In addition, both the students who had to sum up their own scores for each presenter, and the instructor who had to input the data into Excel often made errors. Due to these problems, the presenter decided to create an application so that the students could evaluate their peers online, and allow the data to be summarized automatically.

2. Application development

This presentation will demonstrate the app, which is free for students and teachers to download from the App Store. In addition, a browser-based interface permits the instructor to input the student list and the evaluation criteria and, after the presentations, to download a full report which includes the students' comments on each other's presentations. The students can also view their own results, compare them to the class averages and view the comments made about their presentation on their devices.

3. Future plan

The application currently only works on iOS devices but a version that will work on all mobile devices, built using html5 will be available by the end of the year.

References

Cote, R. A. (2013). The Role Of Student Attitude Towards Peer Review In Anonymous Electronic Peer Review In An EFL Writing Classroom. Unpublished Ph.D. Dissertation available: http://arizona.openrepository.com/arizona/bitstream/10150/307005/3/azu_etd_13017_sip1_m.pdf

Goering l.,(2003). *Carleton College, Planning Student Presentations, Teaching Tips,* Perlman Center for Learning and Teaching, Carleton College. Available: https://serc.carleton.edu/introgeo/campusbased/presentation.html

Mt. Holyoke College. (2006). How to Use and Evaluate Student Speaking & Oral Presentations in the Classroom. Available: https://www.mtholyoke.edu/sites/default/files/saw/docs/evaluating_speaking_guidelines_spring2006.pdf

Examining the forms and functions of silence in the EFL classroom: Using COPS to provide a quantitative perspective

EFL 教室で無言の状態と機能の検討：COPS を用いた定量的な視点

Maher, Kate (Kyoto University of Foreign Studies)

Keywords: student participation, student silence, structured observation

1. Introduction

Despite the impact of silent behaviour on language learning (Bao, 2014; Harumi, 2011; King, 2013), research has focused on verbal classroom participation. This presentation will report on the use of the Classroom Oral Participation Scheme (COPS) developed by King (2013), to examine student silence.

2. Participants and methodology

COPS was used to conduct a 60-minute structured observation of a second year intermediate EFL speaking and listening class of 23 students (six male, 17 female) in a Japanese university. Quantitative data was collected for verbal and non-verbal participation in 30-second intervals using the tallying structured observation format of COPS.

3. Discussion

The results showed that teacher-initiated participation was the largest at 43%, and 14% of the class was spent in silence. This quantitative view of verbal participation provides opportunities for assessing the balance necessary for language acquisition, and monitoring high and low-quality classroom silence. Future applications should consider what behaviour constitutes 'silence' and 'speaking,' and what functional values we attach to them.

Table 1.

Breakdown of oral participation trends

Participation	%
Teacher-initiated	43
Student-initiated	0
Teacher response	0
Student response	3
Student pair/ group	37
Off-task	3
Silence	14

References

Bao, D. (2014). *Understanding silence and reticence: Ways of participating in second language acquisition.* London, UK: Bloomsbury.

Harumi, S. (2011). Classroom silence: voices from Japanese EFL learners. *ELT Journal,* 65(3), 260-269.

King, J. (2013). *Silence in the second language classroom*. UK: Palgrave Macmillan.

動的スケジュールによる語彙反復学習のパフォーマンス向上：e-Learning への活用

Enhancing Repetitive Vocabulary Learning by Active Schedule: Applied for e-Learning

松田 成弘 (神戸市立楠高等学校)

キーワード： e-Learning（語彙学習），分散学習，a desirable difficulty

1. はじめに

英単語を覚えるためにフラッシュカード等を用いた対連合学習(paired associative learning)が広く行われている。そして、分散学習(spaced learning)は、この効果を高めるための有効な方法である。ここで、問題なのは反復が進むにつれて、どれぐらいの数の単語をまとめて学習するか、すなわち「ブロックサイズ」をいかに決定するかである(Nakata, 2011,p. 22)。本研究では、まず一般的な経験則をもとに、初期状態の各復習レベルの「ブロックサイズ」と総復習回数となる「ブロック数」を決定する。そして学習は五問択一のテスト形式で行い、１つのブロックの復習ごとに正答率を評価して、「ブロックサイズ」の増減を行う。この動的な機能により、学習スケジュールは個々の学習者および学習状況に対応したものになることが期待される。本研究の目的は、コンピュータを活用して、個々の単語の学習プロセスを新出練習から総単語数を復習する最終段階まで追跡し、そのデータ分析によって、より e-Learning に効果的な動的スケジュールを提案することである。

2. 参加者と手順

参加者は，中学２年生１名、定時制高校４年生１名の合計２名である。参加者は動的スケジュールを実現したコンピュータソフト「単語力完全マスター」(松田, 2006)のモニター版を使用して、自宅で 1 日 1 回 10 分程度の学習を行った。学習内容は英語の発音を聞きながら、日本語訳を覚えることである。学習する英単語のレベルは高校初級(752 語)である。

3. 結果と考察

各復習段階における正答率の評価は、増減幅の範囲を（ブロックサイズ÷復習のレベル）として行ったが、ここから導き出される正答率の上限値と下限値は復習レベルのみの変数で表わされる相似曲線であることがわかった（「学習曲線」）。記憶の長期保持に有効な“a desirable difficulty”を“successful but difficult”の状態ととらえる(Pyc, M. A., & Rawson, K. A., 2009, p. 437) と、この difficulty は“successful”から“unsuccessful”に変わる転換点に近い。この転換点は各単語によって異なり、語彙学習の初期段階では幅広く分布していると考えられる。分析結果は、「学習曲線」が転換点の分布の広がりを復習段階が進むにつれて、より difficulty の高い位置にせばめていくことを示唆し、「学習曲線」の補正すべき点が明らかになった。

参考文献

松田成弘 (2006) 『単語力完全マスター』（梅田修 英文執筆・監修）コベック

Nakata, T. (2011). Computer-assisted second language vocabulary learning in a paired-associate paradigm: A critical investigation of flashcard software. *Computer Assisted Language Learning*, *24*(1), 17-38.

Pyc, M. A., & Rawson, K. A. (2009). Testing the retrieval effort hypothesis: Does greater difficulty correctly recalling information lead to higher levels of memory? *Journal of Memory and Language*, *60*(4), 437-447.

高校生を対象にした英語授業用タスク

Tasks for English classroom in High school

濱地 亮太 (関西大学 大学院生)

キーワード： タスク開発，教室用タスク，ターゲットなしのタスク，インフォメーション・ギャップ

1. はじめに

ここ十数年のコミュニケーション重視の傾向から日本の学校英語授業の在り方についての議論が続けられている。教室内での学習者による英語使用の機会を増やす試みは様々であり，そのうちの一つが「タスク」の活用である。そこで高校英語授業でのタスク活動で用いることを想定した教材（タスク）開発について発表する。

2. タスク開発：タスクの条件と種類

Ellis & Shintani (2014) が論じるように，タスクには「1. 意味のやりとり 2. ギャップの存在 3.（学習者の）現有リソースの自由な活用 4.（課題達成のための）成果の設定 」の条件が含有されている必要がある。また，日本のタスク研究者（松村や高島など）が論じるように学習・習得を目的にした特定の文法項目の使用を必須にしているもの（focused tasks）と，使用する文法項目を限定しない総合的なタスク（unfocused tasks），タスクの遂行に必要な情報が部分的にしか与えられていないタスク（two-way task）と１人が全情報を持ち他者は全く持たないもの（one-way task），タスク完了時に到達する答えが一つのものと，複数あるタスクなど，種類もいろいろある。

今回発表者が開発したタスクは，Ellis & Shintani (2014) のタスクの条件に加え，「非日常的体験性のあるもの」という条件で作成した。この５つ目の条件は Killi & Lainema (2008) の「ゲームフローの構成要素」を参考にし，「ゲーム性の要素を持ち学習者が夢中になれる（フローの状態）工夫がなされるタスクが効果的だろう」という発表者独自の考えに基づいている。タスクのタイプは，ターゲット言語項目なし・正答到達型タスクである。最後に，タスクの達成目標・レベルは CEFR-J の A2 レベルを想定している。

3. ゲーム性要素のあるタスク

本発表で紹介するタスクは「Scout Task」と「Liar Game」である。「Scout Task」では，学習者はプロ野球球団のスカウトになり，数名の選手情報を読み取り，誰が球団にふさわしい投手かを議論し，オーナーの意向に沿った投手をスカウトする。一方の「Liar Game」は，学習者はある事件の目撃者と警察の２役に分かれ，警察役は，事件の現場の記憶をもとに警察に情報を伝える３人の証人から事情聴取をし，偽の目撃者，すなわち犯人１人を見つけ出す。いずれも，不自然でない程度のゲーム性要素を盛り込んだ，目標言語で学習者が夢中で意味伝達することを目標にした「教育用タスク（pedagogical task)」である。

参考文献

Ellis, R., & Shintani, N. (2014). *Exploring language pedagogy through second language acquisition research*. London: Routledge.

Killi, K., & Lainema, T. (2008). *Foundation for Measuring Engagement in Educational Games. Journal of Interactive Learning Research*, *19(3)*, 469-488.